

令和元年6月18日現在

機関番号：32414

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04082

研究課題名(和文)高齢者のライフスタイルタイプの解明、及び心理社会的支援・活性化モデルの構築

研究課題名(英文)Examination the life style types of the elderly and their characteristics

研究代表者

河野 理恵 (KAWANO, Rie)

目白大学・人間学部・准教授

研究者番号：40383327

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は高齢者における充実した老年期の在り方、及び社会での高齢者の活躍の場を検討することを目的として実施された。その結果、高齢者では個性豊かな5つのライフスタイルタイプが存在することが明らかになった。また、世代性(ジェネラティビティ)への関心が高く、その行動を行っている高齢者ほど個人の自己効力感が高く、精神的健康が保たれていることが示唆された。さらに、若者は高齢者から「蓄積されたもの」「生きること」「人生の過ごし方」の3つを継承したい(学びたい)と考えていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、高齢者におけるライフスタイルタイプとその特徴を明らかにし、老年期の充実したライフスタイルタイプ、あるいは支援が必要と考えられるライフスタイルタイプなどその様態を明確にした。これは高齢者を一様に捉えるのではなく個性ある老いの姿を示すものであり、高齢者の社会的支援を考える際に有効な知見であると考えられる。また、高齢者の世代性(ジェネラティビティ)の観点から、継承する側の高齢者における世代性の影響を明らかにするとともに、継承される若者の側から求められる内容も示唆している。これは世代性という概念を総合的に捉えるものであり、社会の中で高齢者の活躍の場を考えていくために意義があると言える。

研究成果の概要(英文)：This study was carried out for the purpose of examining the substantial old age and the activity place of the elderly in the society. At first, it became clear that in the elderly, there are five distinctive lifestyle style types. Secondly, it was suggested that the interest in generativity is high, and the elderly people who are performing the action have a higher sense of self-efficacy of the individual and maintain mental health. Finally, it has become clear that young people want to want to learn three things of "accumulated", "living" and "how to spend life" from the elderly.

研究分野：老年心理学

キーワード：高齢者のライフスタイル 高齢者の世代性(ジェネラティビティ) 若者が求める高齢者の世代性(ジェネラティビティ)

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

高齢社会白書(2014)によると、我が国の高齢化率は25%を超え、人口の4分の1以上が高齢者という超高齢社会を迎えている。今後も多くの者が高齢者の仲間入りをしていき、2036年には高齢化率が33.3%、3人に1人が高齢者になる時代が到来すると推計されている。このように長生きをする者が多くなってくると、平均寿命とともに健康寿命の延伸にも関心がもたれ、高齢者にとっての充実した老年期の在り方、及び社会の中での高齢者の活躍の場を考えていくことが急務である。

これまでの高齢者を対象とした心理学、及びその他領域における研究では、高齢者を一様に「様々な機能が衰退し、心身ともに護られるべき対象」ととらえていることが多いが、現実の生活では、心身ともに自立し、積極的に社会参加をしている者もいれば、社会的な援助を求めている者もいる。すなわち、高齢者という一括りの枠組みでは説明しきれない、個性豊かな高齢者が実際には存在していると言えよう。しかしながら、この高齢者の個別性を重視し、その特性に注目した研究はあまり行われていない。個性ある老いの特性を的確に理解するため、高齢者のライフスタイルを理解し、老年期において充実したライフスタイルとはどのようなものか、あるいは心理社会的支援が必要なライフスタイルとはいかなるものなのかを明らかにすることは重要であると考えられる。また、社会の中での高齢者の活躍の場や存在意義を明確にするためには、高齢者の世代性(ジェネラティビティ)という、高齢者が次の世代のために行動をとることについて焦点をあて、多角的に検討していくことも必要である。

### 2. 研究の目的

本研究では、以下の3つについて検討し、それらを統合した高齢者に対する社会的支援・活性化モデルの構築を行う。

#### (1) 高齢者のライフスタイル尺度、及びライフスタイルタイプの検討

申請者が2014年に作成した高齢者のライフスタイル尺度を対象者を変えて調査を実施し、デモグラフィックを拡大した調査を行う。また、その尺度をもとに高齢者のライフスタイルタイプを明らかにした上で、カテゴリ化することを目的とする。

#### (2) 高齢者における世代性の検討

高齢者の人生経験や蓄積した知識を次の世代のために活用していくためには、高齢者自身がそのことについてどのような意識をもっているかを明らかにする必要がある。そのため、高齢者における世代性を検討することを目的とする。

#### (3) 若年者が考える高齢者の世代性の解明

高齢者の世代性について広範な視点でとらえるためには、様々なことを継承される側の若年者の意識も明らかにする必要があると考える。そのため、若年者が高齢者をどのように捉え、高齢者に対して何を求めているのかを多角的に明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 高齢者のライフスタイル尺度、及びライフスタイルタイプの検討(2017年)

地方都市(中国・四国地方)在住の65歳以上の高齢者を対象に、ネット調査会社「マクロミル」を通して、クローズ型Web調査を実施した。

#### (2) 高齢者における世代性の検討(2016年)

自宅に居住する65歳以上の高齢者を対象に、2013年から質問紙調査を実施していたものに対し、詳細な分析を行った。

#### (3) 若年者が考える高齢者の世代性の解明(2015年、2018年)

高齢者をどのように捉えているかについての基礎的なデータを得るために、日本と韓国の大学生に対して質問紙調査を実施した。また、若年者は高齢者からどのようなことを継承したいのか、及び高齢者の世代性を阻害する要因と考えられる高齢者との関わりで苦手なのはどのようなところかを明らかにするために、日本の大学生に対して質問紙調査を実施した。

### 4. 研究成果

#### (1) 高齢者のライフスタイル尺度、及びライフスタイルタイプの検討

高齢者のライフスタイル尺度、及びライフスタイルタイプを検討するために、地方都市(中国・四国地方)に在住する65歳以上の高齢者414名(男性232名、女性182名)を対象に、Web上で、高齢者のライフスタイル尺度(エルダーマーケティング研究会、1999)36項目、GHQ12精神健康調査票(中川・大坊、1996)12項目などについて質問紙調査を実施した。平均年齢は68.85( $SD=3.01$ )歳であった。生活状況による内訳は、一人暮らしの男性が81名(19.6%)、一人暮らしの女性が62名(15.0%)、夫婦のみ世帯の男性が151名(36.4%)、夫婦のみ世帯の女性が120名(29.0%)であった。職業による内訳は、無職が161名(38.9%)、専業主婦(主夫)が108名(26.1%)、自営業が49名(11.8%)、その他が96名(23.2%)であった。世帯収入による内訳は、200万円未満が66名(15.9%)、200~400万未満が179名(43.2%)、400~600万未満が81名(19.6%)、それ以上、あるいは無回答が88名(21.3%)であった。

高齢者のライフスタイル尺度36項目を対象に、探索的に因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。固有値の変化と解釈可能性を考慮した上で、因子負荷量が.40未満の項目を削除した結果、4つの因子が得られた。第1因子は、「衣服にかかるお金の割合は多い方だと思う」

‘流行のものには、敏感であると思う’などの8項目に高い負荷量を示していたため、「嗜好重視」と命名した。第2因子は、「地域の行事には積極的に参加している」「地域の人々に貢献する社会活動に参加している」などの4項目に高い負荷量を示していたため、「地域参加」と命名した。第3因子は、「健康のためになるべく身体を動かすようにしている」「健康を保つために努力する」などの5項目に高い負荷量を示していたため、「健康志向」と命名した。第4因子は、「休日にはアウトドアを楽しんでいる」「休日には温泉に行く」などの4項目に高い負荷量を示していたため、「余暇志向」と命名した。それぞれの下位尺度の内の一貫性を検討するために係数を算出したところ、第1因子から順に.81、.86、.75、.74であった。ここで得られた因子構造は、2014年に首都圏に居住する高齢者を対象に行われた調査結果と一致するものであった。次に「まったく違う」を1点、「その通り」を4点として得点化を行い、高齢者のライフスタイル尺度の下位尺度得点を算出した。

個々の高齢者が生活のどのような側面を重視、あるいは軽視するかによってライフスタイルを類型化し、高齢者のライフスタイルタイプを明らかにするために、高齢者のライフスタイル尺度の下位尺度得点を用いて、K-means法によるクラスタ分析を行った。その結果、5つのクラスタが得られ、第1クラスタには96名、第2クラスタには41名、第3クラスタには38名、第4クラスタには65名、第5クラスタには174名が含まれていた。これらの5つのクラスタを独立変数、高齢者のライフスタイル尺度の平均値を従属変数とした分散分析を行った。その結果、すべての下位尺度において有意な群間差が得られたため（嗜好重視尺度： $F(4,409)=57.94$ 、地域参加尺度： $F(4,409)=146.82$ 、健康志向尺度： $F(4,409)=124.52$ 、余暇志向尺度： $F(4,409)=92.45$ 、すべて $p<.001$ ）、Scheffe法による多重比較を行った。多重比較の結果を基に、クラスタの特徴を解釈し、4つの尺度すべての得点が低い「消極群」、嗜好重視の尺度得点が高い「享楽群」、地域参加の尺度得点が高い「地域群」、健康志向の尺度得点が高い「保守群」、4つの尺度すべての尺度得点が高い「積極群」とした。ここで得られたカテゴリ化は、2014年に首都圏に居住する高齢者を対象に行われた調査結果と一致するものであった。さらに、高齢者のライフスタイル(5群)を独立変数、精神的健康の指標であるGHQ12得点を従属変数とした1要因5水準の分散分析を行った。その結果、群間の平均の差は有意であり( $F(4,409)=9.02$ )、Scheffe法による多重比較を行った結果、積極群が他の群に比べて5%水準で有意に得点が低かった。これは積極群の精神的健康が良好であることを意味していた。

本研究の結果から、申請者が作成した高齢者のライフスタイル尺度は、首都圏に居住する高齢者と地方都市(中国・四国地方)に居住する高齢者において、同様の構造が得られ、4つの下位尺度から構成されていることが明らかになった。また、それらを用いて高齢者のライフスタイルタイプを検討したところ、再び首都圏に居住する高齢者と地方都市(中国・四国地方)に居住する高齢者において、同様の結果が得られ、5つのライフスタイルタイプが存在していた。その中で、積極群は精神的健康が良好に保たれていると言え、Erikson, E. H. (1963 仁科訳 1985) が提唱した人間の8つの発達段階において、老年期における健全の側面として挙げられている「統合」が図れているのではないかと考えられた。

Table 1  
クラスタ別下位尺度得点の平均、及び分散分析の結果

	a.積極群	b.地域群	c.消極群	d.保守群	e.享楽群	F値	多重比較結果
	n=96	n=41	n=38	n=65	n=174		
嗜好重視	2.62 (0.38)	1.95 (0.41)	1.63 (0.28)	1.98 (0.45)	2.30 (0.40)	57.94 ***	a > e > d = b > c
地域参加	2.60 (0.67)	2.76 (0.46)	1.10 (0.19)	1.27 (0.29)	1.98 (0.41)	146.82 ***	b = a > e > d = c
健康志向	3.34 (0.33)	2.48 (0.32)	1.85 (0.40)	3.00 (0.36)	2.80 (0.40)	124.54 ***	a > d > e > b > c
余暇志向	2.52 (0.44)	1.43 (0.36)	1.41 (0.43)	1.51 (0.41)	2.08 (0.45)	92.45 ***	a > e > d = b = c

\*\*\*  $p < .001$  ( )内はSD

## (2) 高齢者における世代性の検討

高齢者における世代性に関する意識と行動を検討するために、地域に居住する65歳以上の高齢者276名に対して質問紙調査を実施した。平均年齢は75.05( $SD=3.5$ )歳であり、前期高齢者は122名、後期高齢者は154名であった。質問紙は、世代性関心と世代性行動尺度(丸島・有光、2007)20項目、一般性セルフ・エフィカシー尺度(坂野・東條、1986)16項目、高齢

者のスピリチュアリティ健康尺度（竹田・太湯・桐野・雲・金・中嶋、2007）18項目などが含まれていた。

高齢者の世代性関心と世代性行動尺度は、一般性セルフ・エフィカシー尺度と高齢者のスピリチュアリティ健康尺度との間に1%水準で相関が見られた（順に $r=.29$ 、 $r=.44$ ）。これは、世代性に関心があり、実際に行動をしている高齢者は個人の自己効力感が高く、自己を失わず、精神的健康を保っているということの意味していた。

本研究の結果から、高齢者において世代性に関心があり、世代性に関する行動を行っている者ほど、精神的に良好な状態であることが示唆された。今後、高齢者が充実した老年期を過ごすために、彼らが経験を通して得た知識や生き方などを継承していく機会や場などを設け、高齢者の世代性に関する意識や行動を活性化していくことが必要であると考えられた。

### （3）若年者が考える高齢者の世代性の解明

#### 高齢者との関わりについての検討

若者が高齢者との関わりについてどのように捉えているのかの基礎的なデータを得るために、自分の親が年老いたときに経済的援助や身体的、日常的支援をしたいと考えているかどうかを明らかにすることを目的として質問紙調査を行った。調査対象者は東京都にある大学に通う大学生195名（男性55名、女性140名）とソウル市にある大学に通う大学生303名（男性104名、女性199名）であり、日本の大学生の平均年齢は20.21歳（ $SD=1.99$ ）、韓国の大学生の平均年齢は23.91（ $SD=2.56$ ）歳であった。調査内容は、年齢、性別、老親扶養意識（独自作成）について13項目などについて回答を求めており、大学の講義が終了した後に、教室にて質問紙を配布し、一斉に調査を実施した。老親扶養意識の各項目について、日本の大学生と韓国の大学生の得点に対して $t$ 検定を行った結果、すべての項目において韓国の大学生の方が日本の大学生よりも有意に得点が高いことが明らかになった。例えば、「老親の経済的援助をするのは、子どもとして当然のことだと思いますか」「親の介護をしないのは、子どもとしての役割を怠っていると思いますか」「親の介護は、子どもではなく訪問介護などのサービスで十分だと思いますか（逆転項目）」などでは、日本の大学生と韓国の大学生では1%水準で有意な差が見られた（順に $t(496)=3.42$ 、 $t(494)=9.44$ 、 $t(496)=5.32$ ）。

本研究の結果から、日本の大学生は韓国の大学生よりも、経済的にも日常生活においても自分の親を扶養、あるいは支援することを当然だと思っていないことが明らかになった。このことは日本の大学生の方が、自分の力だけで、あるいは家族だけで老親と関わっていくことを想定しておらず、行政や社会的支援の利用を考えているということを示していると推察される。現在の日本の大学生が生まれたときから日本は高齢化しており、高齢者問題（介護、社会保障など）に関する様々な情報が彼らの耳に入っており、大学生は高齢者の支援には多様な選択肢があると理解しているのではないかと推測された。また、実母は子育て中の娘に対して、親を介護や扶養しようという義務感をもたなくてもよいと認識していたことから（河野・小野寺、2015）、本研究での調査対象者の親も自分の子どもに対して同様に考えており、自分たちの生活と子どもたちの生活は別だと伝えているのかもしれないとも考えられた。

#### 若者が考える高齢者の世代性についての多角的検討

若者が考える高齢者の世代性を明らかにするために、東京都にある大学に通う大学生89名（男性28名、女性52名、無回答9名）を対象に、質問紙調査を実施した。平均年齢は20.05（ $SD=0.84$ ）歳であった。調査は大学の講義が終了した後に、教室にて質問紙を配布し、一斉に実施した。口頭とフェースシートにて調査目的を説明した後、フェースシートに記載された同意非同意のチェックボックスを用いて調査協力への同意を得た。年齢、性別、高齢者との生活経験、高齢者との関係の持ち方をフェースシートで聴取後、高齢者の世代性については、「高齢者から学びたい（教えてもらいたい）と思うところはどのような点ですか。」という指示に対して、自由記述で回答を求めた。また、高齢者の世代性を阻害する要因となると考えられる、若者が考える高齢者の苦手な特徴を検討するために、「高齢者について苦手だと思うところ（嫌なところ、関わりたくないところ）はどのような点ですか。」という指示に対して、自由記述で回答を求めた。

#### 1) 若者が考える高齢者の世代性について検討

得られた自由記述のスク립トデータの中から、若者が考える高齢者の世代性を示しているかと判断された具体的箇所を抽出した。そのうち、意味の内容が同一、あるいは類似した記述ごとにまとめ、カテゴリを作成した。作成したカテゴリについて研究代表者を含む3名で協議し、10名以上の回答者からあてはまる記述箇所が抽出された7つのカテゴリ（「人生経験」「知恵」「伝統」「健康」「歴史」「家庭生活」「人との付き合い方」）を最終的に採用した。次に得られた記述のうち、7つのカテゴリリストに該当する場合は「2」、該当しない場合は「1」と数値変換し、数量化理論 類を行った。その結果、解釈可能性から2軸を採用した。それぞれの軸の固有値は第1軸が0.21、第2軸が0.19であり、累積寄与率は40.25であった。第1軸を横軸に、第2軸を縦軸にとり、「2」とコーディングされた7つのカテゴリスコアに対して散布図を作成した。次に、すべてのカテゴリスコアに対し、Ward法によるクラスタ分析を行い、解釈可能な3つのクラスタを抽出し、散布図上に図示した（Figure 1）。3つのクラスタは、その特徴から、「蓄積されたもの」「生きること」「人生の過ごし方」と命名した。

#### 2) 若者が苦手とする高齢者の特徴の検討

1) で記述した若者が考える高齢者の世代性についてのデータと同様の分析手続きを行い、7

つのカテゴリ（「自己中心的」「マナーの欠如」「年功序列」「頑固」「話が通じない」「怒鳴る」「過去ばかり」）を最終的に採用した。次に得られた記述のうち、7つのカテゴリリストに該当する場合は「2」、該当しない場合は「1」と数値変換し、数量化理論 Ⅱ類を行った。その結果、解釈可能性から2軸を採用した。それぞれの軸の固有値は第1軸が0.20、第2軸が0.19であり、累積寄与率は39.89であった。第1軸を横軸に、第2軸を縦軸にとり、「2」とコーディングされた7つのカテゴリスコアに対して散布図を作成した。次に、すべてのカテゴリスコアに対し、Ward法によるクラスタ分析を行い、解釈可能な3つのクラスタを抽出し、散布図上に図示した（Figure 2）。3つのクラスタは、その特徴から、「自分勝手」「執着」「会話困難」と命名した。

本研究の結果から、若者が考える高齢者の世代性として「蓄積されたもの」「生きること」「人生の過ごし方」が示された。今後、社会の中での高齢者の活躍の場を設ける際には、これらの内容を中心に構成していくことが若者のニーズにかなうのではないかと考えられる。また、高齢者との世代性を阻害する要因として想定した若者が考える高齢者の苦手な特徴が明らかになった。ここで得られた結果である「電車において、何がなんでも座ろうとする（自己中心的）」「大声で話す（マナーの欠如）」などは、高齢者における体力や聴力の低下という身体的な変化がその行動の根底にあるのではないかと推測される。そのため、高齢者がなぜそのような言動をしているのかという理由や背景について、若者が理解していくことも必要なのではないかと考える。

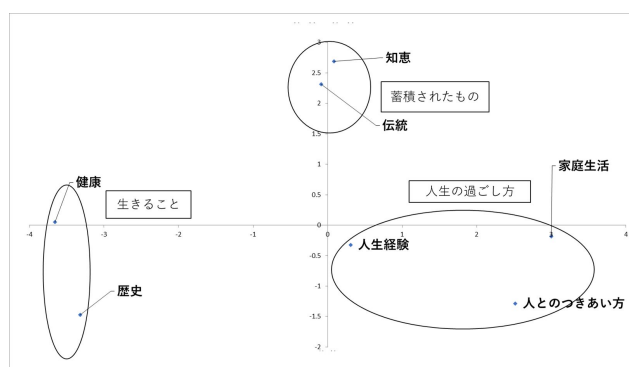


Figure 1 若者が考える世代性の特徴。

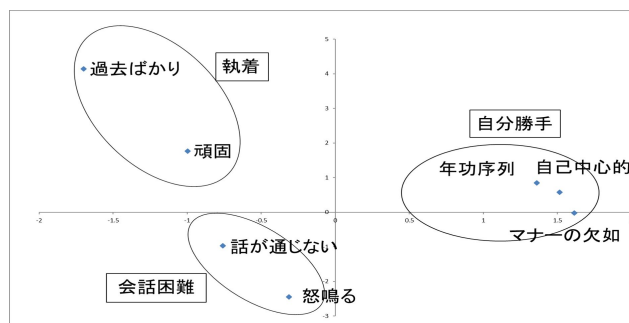


Figure 2 若者が苦手とする高齢者の特徴。

#### (4) 高齢者に対する社会的支援・活性化モデルの構築

本研究の結果を総合的にみると、高齢者に対する社会的支援や老年期の活性化を考えるためには、次のようなことが重要であると言える。

##### 1) 社会的支援について

高齢者の中には、地域の活動にも参加せず、衣食住や健康などにも興味がない者が一定数存在する。そのためこのような高齢者に対しては、散歩や運動などの活動や他者と交流をもつような場を提供する支援が必要であると考えられる。また、若者が苦手とする高齢者の特徴は、加齢にともなう高齢者の衰退機能を示唆しているとの解釈もできる。今後、高齢者と若者が積極的に関与していくためには、若者に加齢に伴う変化や高齢者の特徴を理解してもらうことが重要であると考えられる。

##### 2) 活性化について

高齢者の中には、地域の活動に積極的に参加し、衣食住や健康などにも興味がある者が存在し、精神的健康が良好であることが明らかになった。このことは、老年期を充実したものにするためには、周りの人と関わり、日常生活で様々な感情を持つことが重要であると示唆しているであろう。また、世代性（ジェネラティビティ）の意識や行動を持つことは、自己効力感や精神的健康と関わりがあることが明らかになった。他の世代に何かを継承していくという他者と関わりを持つことも健やかな老年期のために意義あることであると理解された。さらに、若者は高齢者から「蓄積されたもの」「生きること」「人生の過ごし方」など経験に裏打ちされた

ものを継承してほしいと考えていることも明らかになった。高齢者と若者双方のメリットを考慮すると、上記3つのような内容について高齢者から他世代に継承する機会や場を設けていくことが必要であると考えられる。

<引用文献>

- エルダーマーケティング研究会(1999). 高齢者のライフスタイル調査報告書  
Erikson, E. H. (1963). *Childhood and Society*(Second Ed.) New York: W. W. Norton & Company, Inc. (仁科 弥生(訳)(1985). 幼児期と社会 みすず書房)  
平成26年度版高齢社会白書(1996). 内閣府  
河野 理恵・小野寺 敦子(2015). 母娘2世代間における意識の検討(2) - 親の介護および扶養義務感について - 日本心理学会第79回大会論文集, p.1058.  
丸島 令子・有光 興記(2015). 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性、妥当性の検討 心理学研究, 78, 303-309.  
中川 泰彬・大坊 郁夫(1996). 日本語版 GHQ 精神健康調査票手引き(改訂版) 日本文化社  
坂野 雄二・東條 光彦(1986). 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み 行動療法研究, 12, 73-82.  
竹田 恵子・太湯 好子・桐野 匠史・雲 かおり・金 貞淑・中嶋 和夫(2007). 高齢者のスピリチュアリティ健康尺度の開発: 妥当性と信頼性の検証 日本保健科学学会誌, 10, 63-72.

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 1件)

- 河野 理恵・小野寺 敦子(2019). 高齢者のライフスタイルタイプの解明、及びその特徴の検討 目白大学心理学研究, 15, 39-51. (査読有)

[学会発表](計 3件)

- 河野 理恵・小野寺 敦子・讃井 真理・河野 保子(2017). 地方都市に居住する高齢者のライフスタイルタイプの検討 日本老年行動科学学会第20回東京大会プログラム・抄録集, 31.  
Sanai M., Kawano R., Okamoto Y. & Kawano Y. (2016). Generativity and psychological aspects of the local elderly in Japan - Comparison of the previous fiscal year the elderly and late elderly - International Collaboration for Community Health Nursing research, 34.  
Kawano R. & Onodera A. (2016). Comparison of opinions on support of elderly parents between Japanese and Korean university students The 31th International Congress of Psychology, 174.

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: 小野寺 敦子

ローマ字氏名:( ONODERA, atsuko )

所属研究機関名: 目白大学

部局名: 人間学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 40320767

研究分担者氏名: 讃井 真理

ローマ字氏名:( SANAI, mari )

所属研究機関名: 広島文化学園大学

部局名: 看護学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 20412330

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。